

「NO. 01」

(平成 19 年 6 月 29 日の定時連絡協議会での挨拶から)

猪飼会長の後を受け継ぎ、僭越ながら第 10 代の会長職を拝命した。今、その重責を感じているが、ご臨席戴いている諸先輩方にご教授を戴きながら拙きは拙きまま、一生懸命頑張っていきたいと思うので、よろしく願いしたい。

今、法人会を形容する言葉が変わってきている。もちろん、時代の変遷とともに、その目的も存在意義も変化し、とりわけ力強く生き残るためには進化を余儀なくされるのが常である。しかし、ご存知のとおり、法人会には普遍的で、崇高な創設時の基本理念がある。「納税道義の高揚・税知識の普及啓蒙」という大義がそれであり、それを御旗に掲げ、活動を始めた組織が法人会である。従って、単なる親睦会や勉強会などではなく、ましてや町内の掃除を主目的にしているボランティア団体とは違うわけである。単に社会貢献を標榜し、良き経営者を目指そうとする団体は、世の中にくらでもある。今、我々は短絡的に会員増強を目指すのではなく、そこに集った会員が「入会して本当に良かった」と思えるような、そして自分達の活動に意義を見つけられるような、言わば魅力的でやりがいのある組織作りを思考していかなければならないと思う。後で悔やむことのないよう、青年らしく生き生きと、種々のしがらみに捉われることなく、地域を代表する若手経営者として、誇りを持って行動する。青年部会は、そういう活動の場を作っていければと思っている。

結果は、必ず後からついてくるはずである。まずは、11 月に控えている愛媛大会成功に向けて、武村大会会長、池田実行委員長とともに、手をとっていいスタートを切っていきたい。

なにぶん不出来な私ではあるが、精一杯努力をしていきたいと思っているので、2 年間ご指導の程お願いを申し上げて、挨拶とさせて戴く。

「NO. 02」

(平成 19 年 11 月 8 日の青連協第 2 回連絡協議会にて)

いよいよ明日に迫った愛媛大会であるが、武村大会会長、池田実行委員長をはじめ愛媛の皆様方の気合いの入れ方は大変なものがあり、今までにない素晴らしい大会が実現されることを確信している。

猛暑続きの夏が終わったと思ったら、急速に秋が深まり街の木立の色合いもだいぶ鮮明に変わってきており、事業と同じように勝ち負けがはっきりとしてきているような気がしている。燃料の高騰等により、政局同様我々商売に携わる者も混沌としている部分があるが、ここは愛媛大会を契機に、心を一つに世の中に対して素晴らしい発信をしていけたらと思う。今日、明日と長い時間ではあるが、体調に留意されるとともに、意志の疎通を図り、お互いを理解しあい、有意義な時間を過ごして戴きたい。

「NO. 03」

(平成 19 年 11 月 9 日の青年の集い・愛媛大会での主催者挨拶から)

ご紹介を賜りました田口典彦でございます。

僭越ながら主催者の一員として一言ご挨拶を申し述べさせていただきます。

先ずもって本日、この様に盛大な式典を催すことが出来ますのも税務ご当局を始め、ご来賓の皆様方の暖かいご理解とご指導の賜物と有難く厚く御礼申し上げます。

また、開催に当りましては地元愛媛県連、そして我々の同胞であります愛媛県連青連協のお仲間にならぬご尽力を戴きました。衷心より感謝を申し上げたいと存じます。

さて、我法人会は会員数 110 万企業を有する国内最大の経済団体と言われております。法人会が本当の意味で、日本の経済団体の雄なのであれば、ここに集う我々は各々の地域を代表する青年経営者・青年経営幹部として、そのリーダーシップを遺憾無く発揮して行かなければならない訳であります。

私達は法人会という組織の一員である事に誇りを持って、国内企業の 99.7%にあたり雇用者数の 7 割以上を占めると言われる中小企業の発展について性根(しょうね)を据えて取り組んで行かなければなりません。

そして、景気回復の原動力として国民から期待をされる団体へと昇華させて行きたいものであります。

今、公益化の問題に直面し、これを機に飛躍成長することはもちろんですが、言い換えれば大きく進化を遂げるチャンスが来た訳であります。

旧来の陋習や既存の常識に捕らわれず、青年は青年らしく躍動的に種々の柵(しがらみ)に屈することなく、作られたシナリオ通りに動くのでもなく、自ら立てた目標をやり遂げ、その達成感を味わう事によって魅力ある法人会青年部会に仕上げたいものです。

「納税道義の高揚、税知識の普及啓蒙」

この創設時に作られた普遍的で崇高な基本理念に沿った意義ある活動をこれからも皆さんと共に推進して参りたいと存じます。

本日、全国 442 単会から 2 千数百名の同志のお仲間が一同に会しました。

この機会に我々はお互いを理解し、自分の足元もしっかりと見据え、日本の明るい未来に向けて新たな船出をここ愛媛の地から出航しようではありませんか。

本大会が我々の人生の記念すべき心の 1 ページに刻まれる事を念願して止みません。結びに「本日の集い」がここに集う全ての方々の発展の契機に繋がる有意義なひと時となります事をお祈り致しましてご挨拶とさせていただきます。

「NO. 04」

(平成 20 年 6 月 27 日の青連協定時連絡協議会にて)

現在、新公益法人制度の問題があらゆるところで取り上げられており、長い時間をかけて先輩諸氏が協議に協議を重ねてきたところである。私も総務小委員会に青連協会会長として前回初めて参加させて戴き、その折には、状況把握のため聞き役に回ることに専念したところであるが、皆様方を代表しているわけなので、今後は、青年部会としての意見を積極的に申し述べていきたいと思っている。

今や、公益化ありきということがあらゆること的前提条件となっているが、今一度何のための公益化なのかを考えていかなければならないと思っている。公益化を進めるのは難しいという結論で一旦話が終わることが多いのだが、このままずると公益化についての我々の意見がまとめられなければ、法人会というものが雲散霧消してしまうかもしれないと危惧している。

設立時の目的である「納税道義の高揚」、「税知識の普及・啓蒙」という崇高な理念がおおよそいき渡った現在、発展的解消も視野に入れなければならないという意見さえ出てくるのではないかと思う。ゆえに、このような難しい問題はシンプルに物事を考えて行動に移していかなければならない。

この改革により“我々は何を守るべきなのか”“何が社会の中で認められることなのか”。地域の中で自分自身のステータスを守るといったことや、自分の事業運営上都合のいい組織に作り変えるという、そういうご都合主義な方もいるであろう。この組織の本来の目的は何か。公益化のための公益事業をするといっても、今さら掃除や献血だろうか。もちろん、これらを否定するわけではないが、我々はそれをするためだけの会ではないということを改めて認識しなければならないと思う。また、本来の事業運営の優先順位であるとか、充実した共益事業にこそ会員が魅力を感じ、会費を払い活動する意義を感じられるということも忘れるべきではない。「納税道義の高揚」、「税知識の普及・啓蒙」という高邁な理念達成のために活動をするには、やはり共益部分も無視できない。

法人会は税に特化した組織であるという肩書きをはずしたとき、その使命は終わると私は考える。だからこそ、公益化に伴い小手先のあまり手のかからない改革を目指すよりは、抜本的な大改革を余儀なくされているということを感じ覚悟が必要である。関係当局との太いつながりも大事であるが、これを維持しながらも当局の見えないコントロールに惑わされることのないように、私達中小企業者の生きる組織として、大いに足元を見直していきたい。

1970 年代、よくアジアとアフリカが比較されていた。当時、地下資源の豊富なアフリカの方がアジアより大きく発展するだろうと欧米諸国の人々は見ていたところであるが、現在、アフリカとアジアは大きな差がついている。空腹のアフリカの人たちに欧州の人たちはパンを恵んだが、水が飲めないアジアの人たちに日本の人は井戸の掘り方を教えた。小麦粉の種をまき、実を採取し、パンを作る手法を教えたわけであ

る。今、その違いが顕著に出てきているのではないかと思う。

確かに公益化の問題は重要なことであるが、目先にとらわれて、場当たりの、一番簡単な方法で何とかこの問題をクリアしようとする考え方が将来の布石になるかどうか。青年部会として我々は今一度その問題を考えていかなければならない。

私達の事業の中で大きな事業は、全国青年の集いである。この全国青年の集いも今後、全法連主催部分と県連主催部分とを分けて運営することが余儀なくされているわけであるが、本日は、その辺の問題についても、皆様方と協議させて戴きたいと思うので、ご協力のほどよろしくお願いしたい。

「NO. 05」

(平成 20 年 9 月 19 日の青連協役員会にて)

秋も深まりつつあるが、オリンピックも終わって北島選手をはじめとするメダリストたちの活躍に胸を熱くした。また、今朝メジャーリーグではイチロー選手が 107 年ぶりの大記録を達成したと報じられ、8 年連続の 200 本安打とのこと。日本人としての痛快を極めるといったところである。

わが法人会も国家 100 年の大改革を直前に控えて、進化を遂げようとしているが、改革を遂げなければならないという時に、事務局の作ったシナリオに理事会が簡単にラベルを貼ったような施策で、本当にこの変革期を乗り越えられるのだろうか。私は皆さんを代表して総務小委員会なる会議に参加しているが、事務局が提案した A 案、B 案の選択を巡ってどちらが良いかを議論しあう委員の方々を見てがっかりした。果たして、事務局に踊らされているようなこんなやり方でいいのだろうか。我々が青連協運営の役者として演じる台本があるのだとしたら、それは作られた台本ではなく、自らの手で改革を行い、中小企業者の一員である我々がしっかりと生きていけるようなものにしていかなければならないのである。

当然、当局は法人会を大事にしたいはずであり、法人会が公益法人にならずに共益性を目指すということにでもなれば訴訟を起こしてでも阻止をするという話がまことしやかに噂されている。そのような噂話を声高にするのも、勇み足の多い青年部会ならではのことかもしれないが、青年が青年の役を演じなかったら青年部会を組織する意味が全くないのではないかと思っているので、お前は若造だと言われても、お前はまだ良く知らないと言われても、その知る限りの意見は申し伝えていこうと思っている。

健全でありながらも魅力のある会という自分たちのための法人会をこれから作っていかなければならない。その為には、一体この改革で我々は何を求めべきなのか、この組織の本来の目的は何か、ということを確認することが大事だと思う。当局との関係を維持することも大事なことではあるが、何度も言っているとおり、当局の腑抜けな紐付き組織とならないようにしなければいけない。花岡専務のいる前では少々言いつらい話になるが、天下り等の人事面などについても見直ししていく必要があるのではないかと思う。わが法人会はそんなことはないと信じてはいるが、そもそも公益法人改革というのは、高級と言われた出来の悪い官僚が天下ってその組織で好き勝手にすることがあったから問題になったわけで、そんなことから我々が迷惑を被って、我々がやるべき納税道義の高揚、税知識の普及啓蒙等の事業に支障をきたすようであるならば、そんなものはぶち壊していかなければならないのだろうと思う。

先般、仲田副会長に招待されて、北海道青年の集い・室蘭大会に出席した。若人が何か志を立てて、それを達成しようとした時に、途中で焦りやプレッシャーに押し流されてやめることがあってはならない。野口英世博士が渡米して梅毒スピロヘータの純粋培養に成功した話というものを皆さんも知っているだろうが、あの時彼は福島

生家にこう刻んで家を出たと伝えられている。

「志を得ざれば再び此の地を踏まず」

やはり若いと言われる人たちに必要不可欠なものは、その志をやり遂げるという精神力なのではないかと思う。人生は短くあっという間に自分たちも年老いてしまうので、健康に配慮しながらも、余計なものに惑わされず、青年は青年らしくやっていかねばならない。

最近よく「ファジー・何も一生懸命やらなくてもいいじゃないか」という言葉が流行っている。しかし、一生懸命やらなくてもいいじゃないかと言っていい人は、一回でも一生懸命やったことのある人だと思う。一生懸命やった人がはじめて言える言葉ではないかと思う。私はすぐに熱し易くなる不出来な人間ではあるが、一生懸命さだけはありと自負するところがあるので、今後とも厳しくご指導を賜りたい。

「NO. 06」

(平成 20 年 11 月 21 日の長崎大会・部会長サミット第 2 部・円卓会議にて)

今日、此処にお集まり戴いております皆様方は、紛れも無く地域を代表するリーダーであります。リーダーの仕事は自らの主張をきっちり述べることも大切でございますが、参考となる情報を正確に集めることも重要な仕事の一つであろうかと思えます。

442 部会ございます、此処に集った皆様方がどうか自分の主張を述べ、そして、正確な情報をキャッチし、其々の国にお持ち帰り戴きたいと思えます。そういう意味で此のサミットの大きなポイントが御座いますことをどうぞ念頭に入れて戴いて、有意義な一時をお過ごし戴きたいと思えます。

「NO. 07」

(平成 20 年 11 月 21 日の青年の集い・長崎大会での主催者挨拶から)

大東亜戦争終結後、我が国、日本の郷土は焦土と化しておりました。

取り分け此処長崎の地と、広島に於きましては、筆舌に尽くし難い大ダメージが与えられた訳であります。肉親と死に別れ、自らの食べる物すら手に入らない窮状に迫られている時、国の運営を為す税金をどの様にして収納して貰おうか、当時の政府は苦慮をしていた事と思います。国家骨格の形成か、民心の安定かを選ぶ順序は困難を極めた選択だったと容易に想像がつかます。その時、「納税道義の高揚・税知識の普及啓蒙」を大義名分とし、御旗に掲げ立ち上がったのが法人会でした。以来今日まで、諸先輩方の尽力によって、連綿と歴史を綴って参りました。

我々は此処に來まして国家百年の計、新公益法人制度改革に直面を致しております。今こそ、我々は原点に立ち返って、何を為すべきなのか、何のために集っているのかを見直すべきであろうと思います。「よき経営者をめざすものの団体」とか、「社会貢献の団体」とか、世の中の流れに伴い、我が会を形容する言葉が変わってきております。しかし、我々は唯単に街の掃除をするボランティア団体でも無ければ、お友達作りを主目的とする親睦団体でもありません。私達は世の中に対して広く「納税道義の高揚・税知識の普及啓蒙」を訴える税に特化した団体であり、その扉を開けたら、そこに素晴らしい地域の若い青年が沢山いて、こんな素晴らしい同じ志を持つ仲間がいるのなら、もっと多くの人に声を掛けようとする、その手段として、街の掃除や献血運動、そしてあらゆる社会貢献事業に勤しむ事は大変大事な活動になってくる訳であります。更に、卒業の出口を出る時、この会の最も有益な副産物である「友情」を手に入れることが出来る訳であります。

今回、諸外国の情報を入手し、我国のあらゆる文化の発信基地であった出島の国長崎から、原点に立った租税教育事業のあり方について全国に向けて発信を致しました。正に原点回帰であります。租税教育事業は、本年度 1 年間で、全国 442 会のうち 50% の 221 会で活動を履行して戴こうと、高い目標を立てた訳ですが、今日現在何と全国の 256 会で実施して戴いております。改めて皆様方のご理解とご努力に対しまして、高い席からではございますが厚く御礼を申し上げたいと存じます。

人生に於いて青年期は僅かなひと時しかございません。幕末の時代、吉田松陰が下田沖のペリー提督率いる黒船に乗り込もうとし、当時の幕府に捕らわれの身となります。そして、市中引き回しの上、安政の大獄に送られる訳ですが、品川の泉岳寺の前で駕籠を停めさせました。

『かくすれば かくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂』

赤穂四十七士に自らをオーバーラップさせ、この様な歌を詠みました。法を犯せば重罪を問われる事を分かっているながらも、自分の正義感を抑える事が出来なかった。しかし、あんな事も出来なかったと悔やむより、やった事に対しての悔いは無いと考えたのだらうと思われまます。

何時の世も、世の中を大きく変えられるのは若人であります。若いエネルギーであります。私達も単なる親会のお飾りでなく、立派な青年経営者、会社経営幹部として自分達の為にも法人会を魅力ある組織に育て、確りと次代に引き継いで行きたいものであります。今日は北海道から沖縄まで多くの同胞の皆さん2千数百人にお集まりを戴いております。同志としてお互いに胸襟を開いて情報を交換して戴き、有意義な一時を過ごして戴きますことを心よりお願いを申し上げます、冒頭のご挨拶と致します。

「NO. 08」

(平成 21 年 1 月 30 日の青連協役員会にて)

新年明けましておめでとうございます。新しい年を迎え我々も一つ年をとる訳ですが、充実した年のとり方をしたいと思っているのは私だけではないと思います。お蔭様で、私も今年の 6 月一杯をもちまして会長職を辞します。本当に色々と思い出される事が沢山ある訳でございますが、昨年の長崎大会、本当に素晴らしい大会を経験させて戴きました。それと同時に自分もその中の一員であるという事に誇りを感じることができました。このように高揚する気持ちを持つ事がこの会の発展に繋がるのだらうと思います。即ち何事も参画しなければ意味がないという事だらうと思います。

そして、何と言いましても昨年は「租税教育一斉行動」の立ち上げ、これに尽きます。先般、帝国ホテルで全法連・東法連主催の新年賀詞交歓会が行われました。大橋会長のご挨拶の中で、「我が法人会の主たる事業は租税教育である」というお話がありました。これは紛れもなく私達が、法人会たる仕事は何であるか、そしてそれをどのように運営していこうかといったプロセスを経てきた結果だと思えます。有難いと感じた訳でございます。

そしていよいよ新公益法人制度改革、その渦中に巻き込まれていく訳でございますが、このタイミングで法人会を発展・成長させなければなりません。公益化の形を作ることも大切ですが、これを機に法人会そのものを抜本的に見直して、もっとも自分達にとって魅力のある組織にしなければいけないと思う事があります。それを私達の立場から言えば、ひとまず青連協から始めたいと思っています。

そもそも新公益法人制度改革とはご存知の通り、公務員の天下りのインチキな仕組みが国内に蔓延したことから始まっています。役人が都合良く安住の地を作り、いつまで経っても金を引っ張れるシステムを作っている。天下り先の法人への支出はなんと 1 年で 12 兆 6 千億円だということです。年金・雇用保険等々を入れると支出の幅も広がります。こんなものは止めさせなければならない。挙句の果てに“渡歩き”によって、中小企業では考えられない高額な退職金を幾度となく手に入れる。ふざけるなど言いたい。この数日、そういう気運が高まってきているようでございますが、いわば「天下り根絶」が公務員制度改革そのものでございます。国家の仕組み作りも「官僚丸投げ」から健全なる政治主導體制に切り替えなければならない。百年に一度と言われているこの大不況を乗り越えるには、百年に一度の手を打たなければならない。この税収の上まらないご時勢に公務員の給料のカットが出来ない、それどころか労働組合は賃上げを要求している。天下りの質の悪い役人が渡りをし、私腹を肥やす。冗談じゃない。義憤を感じているところでもあります。私は民間の常識が通用しない役人には今こそ厳正なる信賞必罰が必要だと思えます。

翻って、我が法人会においても正に見直していかなければならない問題が山積しています。このままで法人会が本当に良くなるのか、我々が誇りに思える魅力的な組織を創ることができるのだろうか、この新公益法人制度改革を機に将来を担う若い我々

がより真剣に思考しなければならないときだと思えます。問題は「危機認識」の温度差が顕著なことです。それは官僚的発想のドツボにはまっている一部の事務方トップによる情報の操作と、限りなく閉塞的な運営体制が起因していると思えます。癌があれば治療し、治癒しなければ切り取ることだって必要だと思えます。勲章授与を目前にした先輩方にそれをやれというのは酷な事だと思えます。やはり我々若手が手を打ち、しかるべき処に訴求して行かなければならない、そういうタイミングだろうと思えます。そして、一日でも早く情報を正確に供給出来る風通しの良い組織へとこの会を変貌させなければならないと思えます。例えて言うならば、105万会員全員が現状の危機認識を正しく共有し、そこから脱け出して行く為の実に繋がる活動を展開して行く事でありませう。

役所の手先の様な動きしか出来ない人間や、自分に都合の良い思惑通りの運営を目論んでいる人間に丸投げしている場合ではないと思えます。私達は自らの使命に従って、目的をもって、自らストーリーを書き、自ら演じて行かなければならない。一部の事務方が書いた都合の良いシナリオ通りに踊るピエロではない。私たちの思いを彼らの手を借りて具現化していくことが、自分達の仕事だろうと思えます。

いつの世も、世の中は若いエネルギーによって変えられて行くものであります。ビル・クリントンは46歳で米国の大統領に就任しました。「Change」を謳った黒人オバマは47歳であります。アメリカ合衆国第35代大統領、ジョン・F・ケネディは43歳。彼は大統領就任の演説でこういう名言を残しております。「合衆国が何をしてくれるかを問い給うな。我が愛する母国アメリカ合衆国に何が出来るかを問い給え」と彼は名台詞を残しました。私達も法人会が何をしてくれるかを問い給う前に、自分達が法人会に対し何が出来るか、自分達の組織として誇れる、胸をはれる組織に、自分はどうか役立てるのかを、これを機に考えなければタイミングを逸してしまうと思われませう。

事に当たって、不倶戴天の敵は自らの志に欠くる卑屈未練な精神と、恥ずべき事を知らない生き方そのものだと思えます。もう少し我慢すれば勲章が貰える、バッヂが貰えると考えるのはお年寄りだけで十分です。自分達が年をとった時、あんなこともできなかったと悔やむより、やって失敗したけどいい経験が出来たし、そういう経験をさせて貰った事で自分の人生も豊かなものになったと言えるように、私達は動いていかなければいけない。即ち前進をしなければいけないと思う訳であります。愛する法人会の為にも、自分達の地域の為にも、自分達の会社や社員はもとより自分自身の為にも、前に進むことが大事だろうと思えます。

租税教育がルールに乗った今、我々はこの機会に今申し上げたような問題点を払拭できる開けた法人会作りに着手をして行きたい。本日の会議はそんな「思い」を基本とした議案で構成されておりますので、皆さん方の忌憚のない、遠慮のない真剣な意見をこの場で頂戴したいと思っております。3時間の長丁場でございますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

「NO. 09」

(平成 21 年 5 月 22 日の青連協役員会にて)

個性の強い人であっても、いつも弱々しく本音を語らない人であっても、いざという時の判断基準、行動基準をしっかりと身に付けていないとリーダーは務まらないであろうと思う。人が生まれ育った環境と経験によって、自分のセンスを磨く。生まれた土地の因習・慣習・伝統・しきたり・習わし、個人にあっては思想・信条・宗教・家庭教育に至るまで、人それぞれ異なる環境の中で、その人となりの優先順位が付けられて来るのであろうと思う。

翻って今、我々はこの場に集っているが、ともに時間を共有している、その究極的なコンセプトは、魅力ある法人会を作ろう、やり甲斐を感じられるような活動をしよう、とすることにあると思う。その副産物として、この青年部会を卒業する時に素晴らしい友情が手に入り、時には商売上の利害得失にも繋がり、自社の為になったとの実感を持って卒業出来ることが良いわけである。

そのためには、この人生の大切な時間を無駄無く過ごして行きたい。だからこそ我々はこの活動の結果を出していかなければならない。今や租税教育は我々全法連青連協だけの事業では無くなった。全国展開も初動から加速が掛かり、いよいよ大きく展開する時期を迎えた。次は公益法人制度改革のタイミングで、組織の改革をしたいと思っている。我々青年部会の存在意義の明確化、果たして青年部会として何が出来るのか。親会のお飾りでも無ければ言い成りで動くだけの組織であってはいけない。法人会組織の中での立ち位置の確保、これが重要なことであり、かねてより全法連青連協会長は親会理事に登用すべきであると申し立てていた持論を、このたび具現化出来る運びとなった。組織の中における自分達の立ち位置というものは、それぞれ捉え方は違うと思うが、自分達の活動をきちんと整理し、結果として残すことを考えれば、より影響力のある立場で動くことが合理的である。そこで、私の次の会長からとなるが、次期体制においては全法連親会の一角を担う、そういった立場で行動して戴ける。自分達の組織であるとの意識を我々自身が持つことによって、事務方に丸投げするような従来の悪しき体質を改めることが出来る。そして、風通しの良い事務局への体質改善。職員一人一人が嬉々として、組織の一角を担う立派な人間として、働いて貰いたい。そのためには事務局の人事・組織の現在のあり方を変えなければいけない、そのように思う点が幾つもある。だからこそ我々には相応の責任があり、我々が自分達では出来ないのでも今まで通り事務方に運営して貰う、という所に戻ってしまえば、元の黙阿弥である。いずれにせよ、事務局の皆さんにはもっと嬉々として、誇りを持って働いて貰えるように、事務局上層部には周りの意見をきちんと聞く耳を持って貰いたいと思っている。

とかく青年期は一気呵成に勢い任せで動く。しかしながら、軽挙妄動だけは慎まねばならない。折に触れ今の自分の動きは正しいか、今の自分の判断は間違っていないか、足許を見て活動を続けて参りたいと思っている。

私は他人の代弁者のような表現を好まない。それなので自分自身の意見として発言するが、その後ろ盾は同志の皆さんの基本的なコンセンサスによるものが多い。これからも忌憚の無いご意見を戴き、ご指導を戴きながら、残り僅かとなった今期の青連協役員会の運営にお力添えを戴きたいと思う。

「NO. 10」

(平成 21 年 7 月 3 日の青連協定時連絡協議会にて)

本日、北海道から沖縄まで全国から、今後の日本を背負う若いリーダーの方々がお集まりになっていることから、色々な意味で結論を出さなければならないと思っている。ご承知のとおり法人会は今、公益法人制度改革の渦中にある。この改革を成し遂げなければならない。即ちこれは何のための改革なのかという点から始まって、結果、自分たちがやってきてよかったという形に仕上げていかなければならない。私達は様々な社会貢献活動がある中で租税教育活動を選択した。法人会の原点は「納税道義の高揚、税知識の普及啓蒙」にある。その原点に立脚した考え方から、この活動を全国隅々に普及させていこう、という試みを現在進行中である。お陰様をもって本年度は 442 会の 7 割の実施を目標として掲げたところである。大変順調に進んでいるが、先般 6 月に開催された親会の全法連総会では、大橋会長から今や租税教育活動は法人会の基本的支柱であるとのお話を戴いた。また、今年の新年賀詞交換会でも法人会の主たる事業は租税教育であるとのお話を戴いた。今日に至るまでの間、活動の立ち上げ段階では女性部会が中心となって進めようとのお話や、親会が中心となって青年部会・女性部会が協力して実践に移そうとのお話もあった。紆余曲折ある中で、青年部会が主体となって展開することになったものである。加えて、この事業を速やかに運営するに当たっては、組織の改革も必要であろうと思っている。例えば、かつて私は青連協の代表として総務小委員会に参加したが、事前に何の情報提供もなく、会議の中で租税教育 DVD を作るのか A 案 B 案のどちらにするか、と賛否を問われた。ところがそもそも予算がいくらあって費用がどのくらい掛かるのか、全く知らされていなかったもので、どちらにも手を挙げなかった。金額すら知らない中でそんなことを決めるために、全国からご多忙のところ各地域の代表者にお集まり戴いても意味が無いのではないかと感じた。そんな会議なら無くなったほうがよいのではないかと思った。結局、この総務小委員会は無くなった。

ただ、法人会を思う気持ちがあるからこそ、健全な運営を志したいからこそ、そのような考えが芽生えるわけであり、組織改革をする中で、青連協会長が親会の理事に就任して、我々青年部会の意見・コンセンサスをきちんとぶつけていくべきではないか。女連協も同様ではなかろうかということで、熊本の本田全法連副会長に大変お骨折りのご指導を戴いて、親会にこのご意見を上程したものである。現在、理事登用については親会理事会で可決され、この 9 月から私の次の会長に親会理事として就任戴き、我々の意見を単刀直入に直にお伝え戴くことになったわけである。加えて、組織改革の最も大きな問題として、事務局の運営という点があった。財務をきちんと監査する機能が無い、いわば財務委員会のような組織も設置されていない中で、運営面での決定は専務理事と事務局長だけで為されていた。大よそ間違ったことは少ないと信じたいところだが、その手法には大いに問題があると感じた。事務方には優秀な人材がいる。上層部だけで決定するのではなく、事務局内の風通しを良くすべきであり、

きちんと意見交換してコンセンサスをとっていかなければならない。従来、全法連と東法連では意見の相容れない部分が考え方としてあった。ただこれは、全法連対東法連という図式ではないということをお橋会長に申し上げ、また、この状況を収めるためには当時、東法連専務理事であった松本専務に全法連専務理事に就任いただくしかないことも申し上げた。お橋会長は真摯にお話をお聞き下さり、また、膝詰めで話し合うお立場も戴き、色々なご意見を申し上げ、ご無理もお聞き戴いたという経緯もあった。今回、望みどおりの形となり、それらの問題も解決される見通しとなったところである。

このように我々の意見にご理解を戴いたお橋会長、我々を本当にご指導下さった本田副会長、かつて私と一緒に腹を切ろうとまで言って下さった松本専務、このような有難い先輩方に恵まれたからこそ、良い仕事が出来たと思うし、今後の法人会の未来が開けて来るものだと思っている。

体制は整った。それならば法人会として何を指すのか。私は原点回帰を訴えたい。法人会が創設された時の基本理念は「納税道義の高揚・税知識の普及啓蒙」であり、そのために会が存在するのであって、結果として一緒に苦労した仲間が出来るという副産物が手に入るものであろうと思う。

公益化の問題についても、何のために公益化を目指すのか。役所に言われたからやるのではなく、自分たちの会をより魅力的な組織とする手段として、立ち位置がそこにあったほうが有利であろうという判断から為されなければいけない。日本一を自称する経済団体ならば、もっと魅力ある組織への展望を開いていかなければならない。そのためには、能書きだけでなく行動を起こさなければならない。人は正しいか否かだけでは行動に移さない。その組織を率いるリーダーの心意気とか人間性、人としての魅力などで一緒にやろうと決断するものだろうと思う。我々青年部会は、若い組織であるので、意気に感じて心をつにして、目標を失うことなく行動を実践に移さなければならない。

私は本日をもって一兵卒に戻るが、新しいリーダーの力強い船出にエールを送り、開会のご挨拶とさせて戴きたい。